

## D.H.ロレンスのキリスト教 批判と異教への傾倒

経営学部  
山田 晶子

### 【ロレンスの生きていた時代】

イギリスの小説家・詩人・思想家であるD.H.ロレンス (1885-1930) は、第一次大戦を体験した人間であるが、この時代にはヨーロッパにおいて文学・芸術にモダニズムと呼ばれる芸術思潮が起った。モダニズムの時代は、19世紀末から第一次大戦 (1914-18) を挟んで1930年代頃までを指すといわれ、英文学史上では1920年代前後にピークを迎えた。モダニズム文学作品の主要な特徴は、既成の価値観への懐疑、キリスト教批判、価値観の相対性、既成の言葉への懐疑、人間の内面・無意識の探求、作品の結末がオープン・エンディングになっていること等が挙げられる。

### 【ロレンスの生い立ちと作品のテーマの関わり方】

D.H.ロレンスの父親 (A.J.ロレンス) と母親 (L.ロレンス) は、性格や育てられてきた生活・教育環境及び階級が異なっていたために、子供たちが幼い頃から夫婦喧嘩が絶えず、ロレンスも父親が母親に暴力を揮っていたのを見てきたのだが、母親によって父親に反感を持つように育てられた。母親リディアは夫に期待することを諦めた結果、子供たちに立身出世への夢を託すことになった。ロレンスと母親の関係はエディプス・コンプレックスと呼ぶべきものであり、彼はフリーダと結婚するまでに、様々な女性との恋愛において女性とのあるべき関係を確立しようとして苦闘したのだが、それは母親が彼の恋の邪魔をしたことも一因ではあったが、また恋人が彼を所有したがりに束縛

したがることから生じる苦悶であった。

ロレンスの母親は禁欲的なキリスト教徒であったが、19世紀にはキリスト教は性愛を抑圧する傾向が特に強かったので、またキリスト教思想に影響されて育てられた彼の恋人たちは彼を支配しようとしたので、彼はキリスト教が自分の恋愛の成就を妨害する一原因であるとしてキリスト教を嫌悪するようになる。彼の内部では、女性 = キリスト教の精神性、という構図が出来上がったのである。キリスト教では、肉体よりも精神性を重視しており、生殖の目的以外で性を営むことを抑圧する傾向があったのである。特にヴィクトリア朝時代にはこの傾向が強くて偽善的な社会風潮になっていた。

一方で、子供の頃母親から父親への嫌悪感を植え付けられていたにもかかわらず、ロレンスは成長するにつれて自分のうちに存在する「男」の性質が自ずから父親的な官能性を発揮してくることを悟り、このことに気付いた彼は、大人になってからは、作品において「男性」性の重要性を強く主張するようになった。

ロレンスは、キリスト教を信仰する精神的な女性を「白い」女性として描き、彼女の強い精神性に苦しめられる男性を解放する方法を探究しているが、それは「光」を命とするキリスト教に対して、異教的「闇」の追求となっていくたのである。彼の作品には闇の描写がおびただしくあるが、常識的な、悪としての闇という描写が存在する一方で、独創的であるのが「善」なるものとしての闇の描写である。善なる闇を分かり易く表わした言い方が「黒い神」というものである。そしてこの黒い神と人間の仲立ち人として「黒い男」が登場しているが、キリスト教において「父なる神」と人間との仲立ち人になっているキリストに、「黒い男」は対を成している人物と言える。黒い神は性的な神であり、反キリスト教的である。ロレンスのキリスト教批判は西洋文明批判となっているのでその作品のテーマには社会問題が深く入っており、彼の小説は単なる男女の恋物語ではない。

### 【闇と黒い神】

黒い男の特徴は反キリスト教的であるため、反伝統的な存在であり、既成の価値観を覆そうとする異端的存在である。キリスト教は「白い神」を戴くが、「黒い神」は主として異教のパン神（ギリシア・ローマ神話に登場する牧羊神）と関連させて書かれているが、またその他の異教の神話であるエジプト神話やケルト神話等に関連して書かれている。

『恋する女たち』（1920）においては、「白い」女性の支配から逃れ、彼女との関係を断ち切って女性との新しい関係を築こうとするパーキンという名前の男性が登場しているが、彼は恋人アーシュラと「究極の性愛」を体験して、アーシュラは彼の説く「星の均衡」という関係を徐々に理解していく。そして二人は「善なる闇」を知るのである。パーキンは「黒い」男として描かれ、アーシュラは「白い」世界から彼によって救い出されたのである。『チャタレー卿夫人の恋人』（1928）においては、再び「黒い」男として身分が労働者階級の森番メラーズが登場して、コニーという貴族の令夫人を性愛を介して救い出す。

ロレンスはキリスト教会と戦い続けてきたのであり、彼の「黒い神」は、その思想を表わす中核となる用語なのである。また、ロレンスは男と女の対立を描いているが、最終的には両者の均衡を望んでいるのである。彼のキリスト教への反発は既成の価値観への反発であり、彼は新しい社会を求めるとあって、文筆活動によって徹底的に古い社会と戦ったのである。彼は44歳という若さで亡くなったために、世界中に影響を及ぼしてきた名作『チャタレー卿夫人の恋人』がイギリスで裁判に勝訴した（1960年）ことも知らないままであった。しかし彼の戦いは勝利となり、『チャタレー卿夫人の恋人』は現在世界中で完全版を読めるようになっていく。

現在自然を大切にしようという運動が広がっている。ロレンスは「光」を善と考えることによって文明を行き過ぎたものにまで進めている人間の思い上がりを憤り、植物や動物を人間と対等に扱っ

て書こうとした。このような自然の意味を備えた彼の作品の思想である「闇」と「黒い神」は、今後も世界にとって重要なものであると思われる。

注：本稿は、2008年度春学期に筆者が担当した科目「総合演習」の講義ノートの一部に加筆したものである。

## 中国のスヌーピー

現代中国学部  
藤森 猛

### 中国のアニメブーム

中国の青少年の間では、1990年代から外国のアニメーションブームが起こり、映画・テレビやコミック本などの作品では日本アニメの人氣が最も高い。例えば、小学生では『柯南』（名探偵コナン）、『蠟筆小新』（クレヨンしんちゃん）、『櫻桃小丸子』（ちびまる子ちゃん）などのテレビアニメに代表され、中学生以上では『隣居豆豆龍』（となりのトトロ）、『幽霊公主』（もののけ姫）、『千與千尋』（千と千尋の神隠し）などの宮崎駿作品や『新世紀福音戦士』（新世紀エヴァンゲリオン）に代表されるSFアニメ作品などが、アニメブームの火付け役となっている。

また中国では、アメリカのアニメ作品も日本アニメに次いで人氣が高い。一つには、「米老鼠」（ミッキーマウス）や『白雪公主』（白雪姫）、『美女與野獸』（美女と野獸）、『小美人魚』（リトルマーメイド）などのヒロインものに代表される“迪斯尼”（ディズニー）作品であり、一つには“史努